

ニュース・玉川大学ミツバチ科学研究所施設から

マルハナバチに関する報道、放映

ハウス栽培トマトの送粉を促進するために、セイヨウオオマルハナバチがオランダ、ベルギーなどから輸入され、その輸入量は急激に増加している。しかし、セイヨウオオマルハナバチが野外へ逃亡した場合の生態系に与える影響が危惧されている（加藤 真氏から本誌 14 巻 3 号に寄稿されている）。

これらに関連して、当研究施設で研究を進めている日本在来種のマルハナバチ類の飼育について、1994年5月18日、朝日新聞夕刊1面に「欧州産に負けるな、ニホンバチ」と題した記事が掲載された。

テレビ放映に関しては、4月19日のNHK朝のニュース「おはよう日本」で、農家を助けるハチの話題としてマルハナバチが取り上げられ小野正人講師が出演した。

5月13日には NHK スペシャル「生物農薬～小さなムシが日本をねらう～」で、セイヨウオオマルハナバチを含めた輸入昆虫類などについて紹介された。その中で日本産マルハナバチの飼育とセイヨウオオマルハナバチが生態系に与える影響について小野正人講師がコメントを述べた。

ハチミツに関する放映

1993年6月16日、テレビ朝日の「スーパーモーニング」で「ミツバチからの贈り物」と題したハチミツに関する放映があった。その中で保湿性と抗菌性については当施設で収録され、松香光夫教授が出演した。

蚕遺伝資源の長期保存に関する研究会

蚕糸・昆虫農業技術研究所主催による標記のシンポジウムが、1994年6月3日に開催された。家蚕卵の低温長期保存研究、カブラハバチの凍結保存精子と共に、吉田忠晴助教授は「ミツバチにおける凍結保存精子と人工授精」についての講演を行った。

研究施設スタッフの動向

江澤 真講師、脇 孝一講師は、4月1日付で助教授に、中村 純助手は講師にそれぞれ昇格した。

越後多嘉志教授の死去

研究施設のスタッフとしてハチミツの研究に従事されてきた食品製造学研究室越後多嘉志教授は、1994年3月22日に死去された。

心からご冥福をお祈りしたい。

編集後記

巻頭で紹介したようにミツバチ科学研究所施設と名称が変更になったのを機会に「ミツバチ科学」の表紙も変えることにした。15年前の創刊時にも表紙の写真案はあったが、継続して良い写真が掲載できるか、またカラー印刷の経済的な問題もあり、これまで親しまれてきたデザインが採用された。最近では研究施設スタッフが所有している写真も多くなり、今後もミツバチの生態写真を表紙に飾っていきたいと考えている。昨年の冷害による米の不作から今年の状況が気になるところであるが、稲の増産に

ハチミツが関わっていた興味深い内容の寄稿を原氏から受けた。自然の植物から蜜という無償の報酬に対して、何らかの形でお返しをするのが当然の義務という考えから、ミツバチを教材に環境教育や自然学習を実践している安藤氏の今後の展開を期待したい。市野・岡田氏の記事から、キイロスズメバチの古巣の直ぐ近くに営巣したニホンミツバチについて、福岡の新聞社からの問い合わせが思い起こされた。グアテマラで青年海外協力隊養蜂隊員として活躍してきた大木氏、本学昆虫学研究室の卒業研究の一部を吉垣氏、加藤氏から寄稿を受けた。(忠)